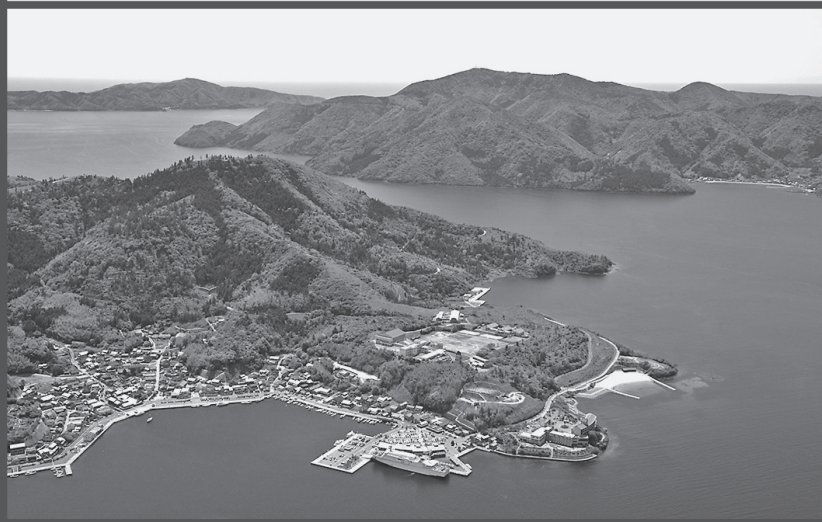


特集 島から考える日本・I



アジア大陸の東縁に沿って散在する七〇〇〇ちかい島々からなる日本。北は礼文島から南は与那国島にいたるまで四〇〇あまりの有人島を数え、そこには一〇〇万人の暮らしがある。

島は、一つひとつが孤立している存在ではない。海洋を含めた連統国土領域の重要な拠点として、国境、領土や領海、排他的経済水域、大陸棚などを確保し、海洋・海底資源を守っている。

他方、まわりを海に囲まれた島は、それぞれが独自の時空間を有する一つの国のようなものもある。固有・稀少の動植物たちのゆりかごであるとともに、島々によって育まれてきた歴史や文化は、わが国の多様性の源泉となっている。

近年の情報化社会の一層の進展、とりわけマスメディアからソーシャルメディアへと情報の受発信のあり方が変

容したことで、離島の動きに接する機会が増え、島々が果たしてきた役割への関心も高まりつつある。

また、自然災害の発生や感染症の流行を契機に、人や物が大量に行き交い、経済の均質化が進む都市生活を見直し、自然と調和し共生する島の生活に目を向ける人々も現れはじめている。

いまこそ、島を基軸に据え、国境域の管理や海洋資源の開発、食糧の確保やレクリエーション・学習環境、先端技術の実証の場の提供など、多角的な視点から島々の持つ意義や役割・期待を再確認し、日本の再生や持続可能な国づくりの可能性を考える時である。来たる離島振興法の改正なども見据えながら、各島で地道に取り組まれている地域づくりの実践事例やさまざまな研究成果などを数回にわたり特集する。



① 海士から発信する持続可能な未来づくり 18

阿部裕志（島根県海士町／中ノ島）

② 教育と交流の拠点となる図書館を運営 24

額賀順子（香川県高松市／男木島）

③ 地域資源のデザイン化と生物多様性の保全活動で活力を 30

富永 健（長崎県対馬市／対馬島）

④ 住民・行政・団体が連携し地域の課題解決に挑む 36

小嶋久実子（長崎県五島市／福江島）

⑤ 関係人口を巻き込み漁業を核とした島づくりを推進 42

大谷真怜（宮崎県延岡市／島野浦島）



海士から発信する 持続可能な未来づくり

——島でつくる新たな出版社や人材育成

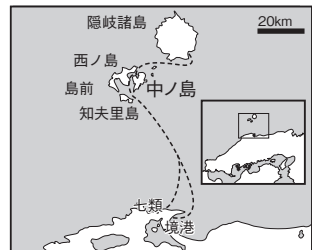
株式会社風と土と代表取締役 阿部 裕志

地域一体で島の未来を考える海士町

私が住む海士町は、島根県隠岐諸島の一つで人口二三五三人、高齢化率三九パーセント（平成二七年国勢調査）の少子高齢化が進む島です。平成一四年には本町と周囲の西ノ島町、知夫村の三町村での合併協議がありました。単独町政を選択、町長をはじめ、職員の自主的な給与カットなどで財政難を乗り越え、C A S（細胞組織を壊さない冷凍技術）を用いた、いわがき春香、隠岐牛などの産業創出や、隠岐島前高校魅力化プロジェクトなど島の生き残りをかけた挑戦を続けてきました。本気度の高い島の魅力に惹かれ、過去一五年間で六二四人が移住し、令和二年四月現在では、その四六パーセントの方々が暮らし続けています。

トヨタ自動車のエンジニアとして働いていた私は、持続

可能な社会づくりを地域一体となって目指している面白い島がある、と友人から聞き、平成一八年に初めて海士町を訪問しました。三日間役場の方に付きっきりで島内を回っていただき、役場職員、町議会議員、地元若者、移住者たちが一緒になって自分たちの島の未来を本気で議論、行動している姿を目にしました。それは、まるで大人が「本気の学園祭」をやっているようで、大都市に暮らし、大企業に勤める私がこれまでに触れたことのない、地域や社会への愛情を感じました。「自分もこの輪に入りたい」と強く思い、その二年後に移住。同時期に島へ越してきた仲間と三人で株式会社巡の環を起業しました。創業メンバーは、私を含め全員二十歳代で、今振り返ると初々しさと青臭さがあふれるスタートでした。



中ノ島：島根半島の北東約60km、隠岐島前の東端に位置する島。面積33.46km²、周囲89.1km、人口2,226人（令和2年4月末現在）。隠岐エネスコ世界ジオパークの一部をなす。対馬暖流の影響で魚介類が豊富。奈良時代から遠流の地に定められたことから歴史的な文化遺産が残る。



菱浦港上空から見た中ノ島(海士町)。

「根差し」「学び」「伝える」事業展開

巡の環は「海士が持続可能な社会モデルになり、学びの場をつくることで、世界に広げる」ことをミッションに掲げました。そこには創業者三人それぞれの物語があります。私の場合、「この競争社会が激化した先に、誰が幸せになるのだろうか」という問いが出发点です。当時、私が働

いていたトヨタは販売台数世界一を目指し、平成二〇年にその目標を実現させました。ある日、日系ブラジルの方が営むひ孫請けの工場を訪問すると、祖国ブラジルの家族に仕送りをするために、低い賃金と劣悪な労働環境で身を粉にして働く従業員の方々の姿を目にしました。私の高い給料と守られた

労働環境は、彼らの犠牲の上に成り立っている——。現代社会では、トヨタや自動車産業に限らず、あらゆる企業が競争に勝ち残ろうと必死で、ピラミッド構造の格差があらゆる分野にあるのではないか。他人を犠牲にしてまで、自分が勝ち残ることが、本当に幸せなのだろうか。そして、人と人、人と自然の温かい関係性にあふれる社会をつくりたいと考え始めたことが、私の原点です。

巡の環では、①海士の魅力を高める地域づくり事業、②海士で島外者向けの研修を行なう人材育成事業、③海士の産品の販売や魅力を発信するメディア事業を始めました。①地域に根差し、②地域から学び、③地域を伝えるという事業展開の意図があります。

地域づくり事業は、総合戦略や景観計画、福祉計画といった島のビジョンづくり、島内の経済循環の見える化や海士らしい幸福度の調査、関係人口を増やすための島内外の交流事業の運営、シンポジウムやイベントの開催、資料館の管理など、島の魅力を高める事業を行ってきました。

人材育成事業は、企業や労働組合向けに「海士あまご五感かんじよく」という人間力を高める研修や社会課題の解決に向けたリーダーシップ研修の提供です。また国や地方自治体の職員、JICAとの提携によるブータンをはじめとした外国人、大学生に対して海士の地域づくりを学ぶ研修も実施してきました。一回あたり一〇〜二〇人、年間二〇回ほど行ない、これまでに二〇〇人以上が参加されています。多くは二

泊三日ですが、数週間や数カ月におよぶ研修もあります。

メディア事業では、島の海産物や農産物、加工品の一般消費者や飲食店への販売、HPや映像・冊子の制作のほか、「AMACAカフェ」という海士ファンが集って島の食や文化を楽しむイベントを通算三〇回ほど開催してきました。

島の方々からは、私たちの活動によって「島外との交流の接点が増え、外の感覚が入り視点や視野が広がった」島内の個人や組織のしがらみを超えた新しいつながりが増えた」「その価値は目に見えづらいが、長期的に大きな効果をもたらすだろう」といった評価をいただいています。

三人で始めた巡の環は、この一二年間で二〇人を雇用、会社を離れた一四人のうち九人が日本各地で起業しています。しかし、ここまでの道のりは順風満帆ではなく、上りの連続で、その状況は現在も変わっていません。

「巡の環」から「風と土」へ

私は工学部出身のエンジニアであり、経営に関しては素人でした。社長になりたいと思ったことも一度もありません。手探りの経営を続け、何度も苦しい局面に直面しました。特に平成三〇年前後は、大きな案件がなくなったために経営が厳しくなり、組織も崩れ社員が数名同時に離れていく結果を招いてしまいました。非常に難しい時期で、大きなビジョンを掲げながらも社員さえ幸せにできない企業に存在価値があるのだろうか、会社をたたむことも真剣



地域づくり事業、ビジョンづくりワークショップの様子。

に考えました。何が根本の原因なのか、信頼のおける島内外の方々にも相談に乗っていただきました。

じつは、巡の環の設立当初、私は代表ではありませんでした。すでにほかの二人が巡の環という社名で起業の準備を進めていたころ、たまたま同時期に海士へ移住予定であった私が彼らと出会い、誘われる形で会社を立ち上げたからです。二年目に代表を引き受けましたが、自ら望んだわけではありませんでした。それから一〇年、代表としての責任感を持つていたつもりでしたが、どこかで「自分がつくった会社でも、自分で決めた社名でもない。

大きなリスクを背負うようならやめればいい」という気持ちもあつたと思います。その逃げ腰な自分が、会社経営よりも地域活動（島の未来づくり）を優先し、それに没頭したため、事業も組織も育ててこれなかったのだと気がつきました。

この時、三九歳だった私は、残り二十年以



平成30年11月に行なった、JICAとの提携によるブータン人青年研修。

上ある仕事人生を考え、今度こそ「経営者」という仕事に挑戦しようと決意しました。極論すると「地域V会社」だったモノサシを、「地域へ会社」に変える。つまり、よい会社をつくり、結果として地域の役に立とうと、経営者になる決心をして、社名を「風と土と」に変更することにしました。

新しい社名には「風土」という言葉を用いています。中国の歴史家・司馬遷しばせんの言葉に、「地理が風土をつくり、風土が人をつくり、人が歴史をつくる」とあります。私自身が、「風は目に見えず遠くからやってくるもので、土は目

に見え命を育むもの（つまり風はまだ見ぬ新たな可能性、土は現実）」だととらえおり、社名には、そんな新たな可能性（風）を現実（土）にしていこうという意味を込めています。

加えて、親子島留学（町内の小中学校に通う児童生徒を全国から受け入れる

親子滞在型の留学制度）で海士に一年半暮らした英治出版えいじの原田英治社長から、最後に「と」をつけてはどうかとアドバイスもらい、「風と土と」という社名が誕生しました。まるで自分の子どもに名前をつけたような気持ちでした。

平成三〇年一〇月に社名を変更。大勢の方々と話すなかで、「風の人（よそ者）と土の人（地元）が共に風土を創る」という新たな意味も見出すことができました。

社名変更に合わせて事業も見直し、役割を終えつつあったメディア事業を閉じ、新たに英治出版と提携して出版社「海士の風」を立ち上げました。出版業は、東京など大都市に一極集中している代表的なビジネスですが、デジタル化が進むこの時代に、あえて辺境の島から温かい関係性を高める叡智を本にまとめ、発信していきます。現在、数冊の企画が進行中です。英治出版の編集者と私たち、そして著者が想いを共有し、丁寧な本づくりを進めています。三者が温かい関係性を構築することで、今後は、人材育成事業で連携したり、住民の知見を広げるために著者に来島してもらいなど、本だけに留まらない価値を生み出すことができるでしょう。

三つ目のステージで考える地域づくり

移住当初、海士にはこれから三つのステージがあると考えました。第一ステージは、移住者がメディアなどに取材されて目立つ時期。第二は、地元出身の人たちが「ここは

自分たちの島だ」と立ち上がる段階。第三ステージが本番で、第一〜二のフェーズの大人たちの背中を見て育った子たちが成長し、活躍する時期です。私は、地元の人と移住者が分断を起こすのはもったいないと思い、お互いを理解し、強みを活かして協力し合える道をつ

くすることに全力を注いできました。

平成二七年度、全国の多くの自治体が地方創生の総合戦略を策定しました。海士町では次世代リーダー育成を目的に、五〇歳以下の行政職員や民間人、地元出身者や移住者など、さまざまな分野の次世代の担い手二〇人からなる「明日の海士をつくる会」を立ち上げ、総合戦略の元となるビジョンを自分たちで描き、自ら実践していく誓いを立てました。リーダーは地元企業の経営者で、事務局長も地元出身の役場職員。私はこれがまさに第二ステージの象徴であ



暮らしの中の知恵や経験、資源を調べ、学び、認識する「地元学」のフィールドワークにて。

ると思いました。

あれから五年が経ち、二〇人のメンバーは経営者や役場の課長になるなど、島の中核人材としてさまざまな活動を続けています。このつながりは、今後さらに大きな力になると信じています。また、高校魅力化プロジェクトで育った子どもたちが大きく成長して島に戻り、彼らが活躍していく土台も生まれつつあります。これからいよいよ本番の第三ステージが始まります。

私の移住当初に比べ、海士はより島内外に開かれた島となり、新たなことに取り組みやすくなったと感じています。多様性を認め合える「挑戦できる島」という空気は、島生まれの意欲ある若者を地元に戻流させるとともに、島に魅力を感じて新しいことにチャレンジしたい人の移住や、島外に住んでいても島との関わりを持ち続けたいという人材（関係人口）を生み出すのではないのでしょうか。SDGsの広がりなどで、企業を含めた社会全体の動きが大きく変わってきている昨今、海士をはじめ地方への人材流動は増加しています。地元の人と移住者、それに島との関係を大切にしていく多くの人材が力を合わせ、未来を考え実行する機会を生み出していきたくて考えています。

島内外に開かれた「挑戦できる島」を目指して

現在、世界中が新型コロナウイルスの脅威にさらされています。特に、医療環境が脆弱で高齢者の多い全国の離島

地域は水際対策を徹底しなければならず、海士も同様です。デンマークのフェロー諸島のように、検査体制の充実、隔離施設の確保によって、感染者が発生しても死者を出さずに乗り切っている事例もあります(註)。感染防止に向け水際対策を徹底する際には、島外に住み海士町を応援してくれる方々に対して来島の自粛をお願いするなど、どうしても排他的にならざるを得ないケースが出てくることもあり。しかし、私は今こそ物理的距離を超えた心のつながりを育むべき時だと思っています。

コロナ禍をきっかけに、都市生活に不安を感じる人が増えたと聞きます。リモートワークや遠隔医療・授業が広く一般化した今日、島はどんな手を打てるのか。大きなチャンスでもあると感じています。この事態の収束後、島の排他性が強まってしまおうのか、それともさらに多くの人々を惹きつける島となるのか。真に開かれた「挑戦できる島」になれるかどうかが問われています。

私が目指しているのは、笑顔で挨拶をして、困ったら助け合い、お祭りなど地域の文化が継承され、資源は枯渇せず、大自然の中で思いきり遊ぶことができ、美味しい自然の恵みもいただける、そんな人と人、人と自然の血の通った結びつきのある未来です。

社会から課題がなくなることはありません。不確実性が増した世界では、コロナのようにいまだ経験したことのない課題も生まれます。そんな時代だからこそ変化を恐れず、

人々が幸せに暮らせる新たな社会をつくってきたいと考えています。どんな困難に陥ろうとも人々が助け合い、自然と共存しながら解決につながる道を模索していける社会。これから築くべき持続可能な社会は、テクノロジーや社会システムの進化だけで実現できるものではなく、全国の島々で脈々と息づいてきた温かい関係性が、広く深く根づく社会ではないでしょうか。海士の暮らしの中には、そんな未来の種があります。だからこそ、都市ではなく海士に本社を置き、その種を本という形で世に出し、「風と土と」独自の事業や研修を通して大きな森に育てていけるのだと思います。



阿部裕志(あべひろし)

株式会社風と土と代表取締役。1978年愛媛県生まれ、愛知県育ち。2008年に海士町へ移住し、株式会社巡の環を起業。2018年社名変更し、地域づくり事業、人材育成事業、出版事業を行なう。著書に『僕たちは島で、未来を見ることにした』(株式会社巡の環、2012年、木楽舎)。

(註) 詳細は「Veterinary scientist hailed for Faroe Islands' lack of Covid-19 deaths」(<https://www.theguardian.com/world/2020/apr/08/veterinary-scientist-hailed-faroe-islands-lack-covid-19-deaths>)参照。